

『源平盛衰記』教材化論

井上 翠

一、はじめに

『源平盛衰記』（以下、盛衰記）は、他の『平家物語』諸本にはない多くの故事説話を有している。本稿は、その特長を用いることによって、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく古文・漢文複合教材の可能性を考察するものである。高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容（2）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、また、古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである盛衰記という一作品のなかで中国故事説話を捉えることによって、国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義について学習者の理解を深めることにも役立つであろう。

二、大場早馬

卷第十七「大場早馬」は、平清盛をはじめとする平氏一門に源頼朝挙兵の知らせが届く場面である。学習者の多くは、頼朝が助命され伊豆に流されていたことを日本史の学習によって把握しているとともに、源平合戦の幕開けとして頼朝挙兵を捉えており、「大場早馬」は正にその瞬間を描く場面として取り上げられよう。国語教科書に使用されることが多いのは覚一本『平家物語』（以下、覚一本）であり、覚一本にもこの場面は見られるが、盛衰記において「大場早馬」の後に見られる「勾踐夫差」を用いて古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくため、覚一本ではなく盛衰記を使用する。

治承四年九月二日、相模國住人、大場三郎景親、東國ヨリ早馬ヲタツ。福原新都ニ著テ、上下ヒシメケリ。「何事ゾ」ト聞バ、「伊豆國流人前右兵衛権佐源頼朝、一院ノ院宣、高倉宮令肯在ト称シ、同國目代平家ノ侍和泉判官平兼隆ガ八牧ノ館ニ押寄テ、兼

隆家人等夜討ニシ、館ニ火懸テ焼拂フ。同廿日、北條四郎時政ガ一類ヲ引卒シ、相摸ノ土肥ヘ打越テ、土肥土屋置崎ヲ招キ、三百餘騎ノ兵ヲ相具シ、石橋ト云所ニ引籠。景親武藏相摸ニ平家ニ志アル輩ヲ催集テ、三千餘騎ニテ、同廿三日ニ石橋城ニ押寄。源氏禦戦トイヘ共、大勢ニ打落サレテ、兵衛佐杉山ニ逃籠テ、不知行方。同廿四日ニ相摸國由井小坪ニテ、平家ノ御方ニ武藏國住人畠山庄司重能ガ子息次郎重忠、五百餘騎ニテ、兵衛佐ノ方人相摸國住人三浦大介義明ガ子共、三百餘騎、責戦トイヘドモ、重忠三浦ニ戦負テ、武藏國ヘ引退。同廿六日ニ武藏國住人江戸太郎重長、河越小太郎重頼ヲ大将トシ、黨ニハ金子村山々口篠黨兒玉横山野與黨綴喜等ヲ始トシ、二千餘騎、相摸ノ三浦城ヲ責。三浦ノ一族絹笠ノ城ニ籠テ、一日一夜戦テ、矢種盡テ船ニ乗、安房國ヘ渡畢ヌ。又國々ノ兵共内々ハ源氏ニ心ヲ通スト承ル。御用心アルベシトゾ申タル。平家ノ一門此事ヲ聞、「コハイカニ」ト騒アヘリ。若者ドモハ興アル事ニ思テ、「アハレ討手ニ向ラレヨカシ」ナド云ケルゾ哀ナル。畠山庄司重能、小山田別当有重兄弟二人ハ、折節平家奉公シテ候ケルガ、申ケルハ、「北條四郎時政ハ親ク成テ侍バ實ニ尻前ニモ立候ラン。其外ハ國々ノ兵共誰カ流人ノ方人シテ朝敵トナラント思侍ベキ。只今聞召直サセ給ベシ」トゾ申ケル。「實ニモ」ト云人モアリ、又「イサく大事ニ及ヌ」ト云人モアリ。是彼ニ寄合々々、「恐シく」ト私語ケリ。太政入道安カラズ被思テ宣ケルハ、「東國ノ奴原ト云ハ六條判官入道爲義ガ一門、頼

朝ニ不相離侍共ト云モ、皆彼ガ随ヘ仕シ家人也キ。昔ノ好争カ可忘。其二頼朝ヲ東國ヘ流シ遣シケルハ、ヤ八箇國ノ家人ニ頼朝ヲ守護シテ入道ガ一門ヲ亡セト云ニアリケリ。喩バ盗ニ鎗ヲ預ケ、千里ノ野ニ虎ヲ放タルガ如シ。イカゞスベキ、入道大ニ失錯シテケリ」トテ、座ニモタマラズ躍上々々シ給ケレ共、後悔今ハ叶ハズ。良案ジテ宣ケル。「但頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ。縦故池ノ尼公イカニ宥給フトテモ、入道ユルサランニハ、頸ヲバ継ベキヤ。其二重恩ヲ顧ズ、淨海ガ子孫ニ向ヒ弓ヲ引矢ヲ放シ事、佛神ヨモ御免アラジ。佛神免シ給ハズバ、天ノ責忽ニ蒙ルベシ。奇シノ鳥獸マデモ恩ヲバ報トコソ聞。其二還テ入道ガ一門ヲ亡サントノ企不思議也。我子孫七代マデハ争カ怨心ヲ挟ベキ」ト、シカリ音ニテクリカヘシく宣ヒケル。

（盛衰記 卷第十七「大場早馬」）

頼朝の挙兵は、「東國ヨリ早馬」という形で平氏に伝えられており、福原新都にあつて「何事ゾ」と聞く人々とともに、学習者が「廿日」「廿三日」「廿四日」「廿六日」と日ごとに變化してゆく戦況を捉えることができる構成となつてゐる。そして、「頼朝ヲ東國ヘ流シ遣シ」たことに對する清盛の後悔や「頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ。縦故池ノ尼公イカニ宥給フトテモ、入道ユルサランニハ、頸ヲバ継ベキヤ」という思いなどが語られており、先述のとおり、学習者の多くが日本史の学習によつて把握してゐる頼朝の助命、伊豆への配流と、その後の平氏滅亡につながる挙兵を、清盛の心情とともに捉えること

ができる。「大場早馬」は国語教科書に掲載されていない章段であるが、取り上げられている場面、構成、展開の面から見ても、古典の教材として有用なものの一つとなり得よう。

三、勾踐夫差

さて、頼朝拳兵の知らせを聞いた清盛の「頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ」「重恩ヲ顧ズ、浄海ガ子孫ニ向ヒ弓ヲ引矢ヲ放シ事、佛神ヨモ御免アラジ。佛神免シ給ハズバ、天ノ責忽ニ蒙ルベシ」という発言に、「時ノ才人ドモ」は、「入道ノ氣色ニ入シ」として、「仰少モ違ベカラズ。朝憲ヲ嘲リ、王命ヲ背ク者、昔ヨリ今ニ至マデ素懷ヲ遂ル者ナシ」と述べ、その先例を示してゆく（盛衰記 卷第十七「謀叛不遂素懷」）。それは頼朝の「謀叛」が「不遂素懷」であろうことを例証するものである。だが盛衰記では、さらにその後、「又内々私語ケルハ、恩ヲ忘れ無勢ナルニハヨラズ、只天運ノシカラシムルニ依ベキ事也。其謂ハ」として、以下のように続いている。

昔唐ニ越王勾踐、吳王夫差トテ、二人ノ國王御座シケリ。互ニ中惡シテ共ニ傾ケントテ、會稽山ト云山ノ麓ニシテ度々戰ケル程ニ、①吳王ハ元ヨリ勢多威スグレタリケレバ、越國ノ軍敗レテ勾踐生捕レヌ。②今ハ力ナクシテ降ヲ請テ歎ケレバ、吳王憐ヲタレテ勾踐ガ命ヲ助ク。臣下諫テ云、「敵ヲ宥テ必後ニ悔アリ。忽ニ越王ノ命ヲ断シニハシカジ」ト申ケレ共、勾踐ハ木ヲ樵水ヲ汲マデハナケレ共、二心ナク仕ケレバ、臣下ノ諫ヲモ聞ザリケリ。吳

王病シケル時、醫師ヲ請テ、是ヲ見ス。醫師ノ云、「尿ヲ人ニ吞セテ、其味ヲ以テ命ノ存亡ヲ知シ」ト申セドモ、宮中ノ男女共ニ、「吳王ノ尿ヲ吞シ」ト云者ナシ。勾踐進出テ云、「吾君ノ為ニ命ヲ被助テ其恩尤深シ。尿ヲ吞デ報奉ラン」ト申テ、即是ヲ吞。味タガハザリケレバ、吳王ノ病愈ニケリ。吳王後ニ越王ノ志ヲ悦テ本國ニ返シ遣ス。勾踐角仕ヘケル事ハ、再舊里ニ帰テ、吳王ヲ亡シテ本意ヲ遂ントノ計也。③勾踐赦サレテ本國ニ帰ケル。路ニ蛙ノ水ヨリ出テ躍ケレバ、馬ヨリ下テ是ヲ敬フ。奢レル者ヲ賞スル心ナルベシ。其後數万ノ軍ヲ起シテ終ニ吳王夫差ヲ亡シケリ。④サテコソ會稽ノ耻ヲバ雪メケレ。其ヨリシテゾ、恥ミルヲバ會稽トモ申ケル。

盛衰記では、「恩ヲ忘れ無勢ナルニハヨラズ、只天運ノシカラシムルニ依ベキ事也」として會稽山ノ故事説話が續くのである。その内容は、越王の勾踐と吳王の夫差が戦をするなかで、勾踐が生け捕りとなるが、夫差が憐れみをたれて勾踐は死罪を免れ、捕虜となった勾踐は熱心に奉公し、赦されて本国に帰された後、大軍を率いて夫差を滅ぼしたというものである。これを先例として、頼朝拳兵の成否について、夫差に助命された勾踐が後に夫差を滅ぼしたように、清盛に助命された頼朝が勝利する可能性を示している。「大場早馬」とそこで描かれた頼朝拳兵の成否の先例としての「勾踐夫差」を取り上げるだけでも、学習者は古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである盛衰記という一作品のなかで漢文の授業へ

とつながる中国故事説話を捉えることができれば。

さらに、盛衰記では巻第二においても会稽山の故事説話が見られ、それを巻第十七と比較することによって、盛衰記という一作品のなかで同じ故事説話がどのように用いられているかを考えることができ、また、国語の授業において古文と漢文を学習する意義について理解を深めることができる。巻第二「會稽山」は、「額打論」とその報復としての「山僧焼清水寺」に続くものである。

新院御葬送ノ夜、延暦興福兩寺ノ大衆、額打論シテ狼藉ニ及ベリ。ソノ故ハ主上御葬送ノ作法ハ、諸寺諸山ノ僧徒等、悉ク供養シテ我寺々ノ額ヲ立次第ヲ守テ御供ヲ仕ル。南都ニハ一番ニハ東大寺ノ行ヲ立テ額ヲ打、二番ニハ興福寺ノ行ヲ立テ額ヲ打、其外末寺々打並ブ。北京ニハ一番ニ延暦寺ノ行ヲ立テ額ヲ打、山々寺々次第ヲ守テ立並ルハ先例也。爰ニ山門ノ衆徒今度ノ御葬送ニイカゞ思ケン、東大寺ノ行ノ次ニ延暦寺ノ額ヲ打タリケレバ、興福寺ノ大衆ノ中ニ東門院ノ觀音房、勢至房ト云フ惡僧アリ、三枚皮威ノ大荒目ノ鎧、草摺長ニサゞメカシ、三尺五寸ノ太刀前低ニハキ、興福寺ノ額ヲ大長刀ニ取具シテ、高ク指上テ延暦寺ノ額ノ上ニ、我寺ノ額ヲ立副テ、皆紅ノ月出タル扇披仕、山門ノ衆徒ニ向テ申ケルハ、「先規ニ任テ額ヲサゲラレテ、衆徒安堵セラレヨヤ」ト、高聲ニ申ケレ共、山門ノ衆徒良久申旨ナシ。觀音房、勢至房、長刀ニテ延暦寺ノ額ヲ二刀切テ、「衆徒ノ所存其心ヲエズ。我ト思ハン大衆ハ、落合ヤ〜」ト訕テ、馳廻ケレ共、落合者

ナシ。二人ノ者共ハ、「ウレシヤ水鳴ハ瀧水」ト歌テ、オレコダレ〜、一時計舞タリケル。延暦寺ノ大衆先例ヲ背キ狼藉ヲ出ス程ナラバ、其庭ニシテ手向ヘスベキニ、臆病ノ至リ歟、所存ノアルカ、一言ヲモイハザリケリ。一天ノ君、萬乗ノ主、世ヲ早セサセ給メレバ、心ナキ草木マデモ猶愁ノ色有ベシ、況人倫僧徒ノ法ニ於ヲヤ。而ヲカ、ル浅猿キ事シ出シテ、式作法散々ト有ケレバ、高モ卑モヲメキ呼ビ東西ニ迷ケルコソ不便ナレ。

（盛衰記 巻第二「額打論」）

去程ニ大衆ノ下向ハ、平家ノ事ニハ非ズ、去七日ノ額立論ニ會稽ノ耻ヲ雪ンガ為ニ、興福寺ノ末寺ナレバ、清水寺ヲ焼拂ハントテ下ルト云ケレバ、清水法師老少ヲイハズ騷アヘリ。俄事ニテハアリ、物具ノ有モ無モイハズ、二手ニ分テ相待ケリ。一手ハ清水清閑兩寺ノ境ヒ堀切テ、逆木引テ、瀧ノ尾ノ不動堂ヨリ木戸口マデ、五百餘騎ニテ固メタリ。一手ハ山井ノ谷ノ懸橋引落シテ、西ノ大門ニ垣楯カキ、食堂廻廊木戸口マデ、一千餘騎ニハ過ザリケリ。京童部ガ申ケルハ、「蟪蛄舉手招毒蛇、蜘蛛張網襲飛鳥ト云喻ハ此事ニヤ、山門ノ大勢ニ敵對シテ危々」トゾ申ケル。山門ノ大衆追手搦手二手ニツクル。搦手ハ大關小關四宮川原モ打過テ、九集滅道ヤ清閑寺、歌ノ中山マデ責寄タリ。追手ハ西坂本、下松、新道越ヲ打過テ、清水坂、晴尾ノ觀音寺マデ責付タリ。清水法師モ思切、楯ノ面ニ進出テ、散々ニ戰ケレドモ、大勢雲霞ノ如クナリケル上ニ、時刻ヲ經ズ、ヤガテ坊舎ニ火ヲ懸タリ。折節西ノ風

烈ク吹テ、黒煙東ニ覆ヒケレバ、寺僧今ハ防戦フニ無力、本尊ヲ負、坊舎ヲ捨テ、延年寺、赤築地ニノ閑道ヘゾ落行ケル。サテコソ山門ハ會稽ノ耻ヲバ雪ヌト思ケレ。

（盛衰記 卷第二「山僧燒清水寺」）

「額打論」とその報復としての「山僧燒清水寺」を取り上げるだけでも、東大寺や清水寺といった学習者に耳馴染みのある寺々や、清盛と後白河院の対立が示唆されている点など、古典の教材として有用なものの一つとなり得るが、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくために留意すべき点は、會稽山の話説話への展開である。

山門の大衆の下向は「去七日ノ額立論ニ會稽ノ耻ヲ雪ンガ為ニ、興福寺ノ末寺ナレバ、清水寺ヲ燒拂ハントテ下ル」とされ、対立する興福寺の末寺である清水寺は焼き払われてしまう。その後、「サテコソ山門ハ會稽ノ耻ヲバ雪ヌト思ケレ」として、以下のように続いている。

會稽ノ耻ヲ雪トハ、異朝ニ稽ノ山ノ洞ト云所アリ、蚕山トモ名、會稽山トモ申也。吳越ノ境ニ在之トカ。两国境ヲ論ジテ、代々ニ軍絶ズ。此山ニハ桑多生ジテ、蚕繭ヲツクリ、絲ヲ出シ綿ヲ成故也。越國ノ允常王ト吳國ノ闔閭王ト此山ヲ論ジテ、合戦絶ザリケル程ニ、吳王軍ニ誅レテ、越王知之。越王ノ子ニ勾踐ト云王アリ。吳王ノ子ニ夫差ト云王アリ。互ニ親ノ敵也ケレバ、勾踐思ケルハ、夫差ガ父ヲバ我父誅之、サレバ我ヲバ敵ト思テ、定テウタント思フ心有ラントテ、軍ヲ起テ戦フ程ニ、①アヤマチテ勾踐被虜タリ。吳國ニ止誠ラレテ本國ニ帰事ヲエズ。②勾踐木ヲコリ草ヲカラヌ

計ニ奉公シケレバ、死刑ヲ被宥召仕ハレケリ。夫差病スル事有キ、療術力ナキニ似タリ。醫師ノ云、「尿ヲ令飲、味ヲ以テ存否ヲシラン」ト云ケレ共、彼ヲ飲マント云臣妾ナシ。囚勾踐ガ云、「我無益ノ謀叛ヲ起シテ誤テ虜レヌ。其咎死刑ニアリト云ヘドモ、君ノ恵ニ依テ命ヲ助ラレタリ。洪恩生々ニ難報須恩ヲ謝セン」ト云テ飲之。夫差其志ノ深事ヲ感ジテ、本國ニ返遣シツ。勾踐後二大軍ヲ起テ終ニ吳王ヲ亡シケリ。④會稽山ヲ論ジテ軍ニ負尿ヲ飲ハ耻也、本國ニ還テ敵ヲ誅テ彼山ヲ知ハ耻ヲ雪ル也。故ニ會稽ノ耻ヲ雪トイヘリ。去七日ハ山門額ヲ切レテ恥ニ及、今九日ニハ清水煙ト昇テ面ヲ洗グ。實ニ耻ヲ雪ト云ベキニヤ。

（盛衰記 卷第二「會稽山」）

卷第二では、「會稽ノ耻ヲ雪ンガ為」として清水寺が焼き払われ、山門はそれを「會稽ノ耻ヲバ雪ヌ」と思ったとされており、その「會稽ノ耻ヲ雪」の由来として會稽山の話説話が示されている。⁽¹⁾

卷第二と卷第十七を比較すると、まず、勾踐が生け捕られた理由について、卷第二では「アヤマチテ勾踐被虜タリ」とする一方、卷第十七では「吳王ハ元ヨリ勢多威スグレタリケレバ、越國ノ軍敗レテ勾踐生捕レヌ」として、その理由に軍勢の差が挙げられている（傍線部①）。これは卷第十七「勾踐夫差」の冒頭に呼応したものである。先述のとおり、「勾踐夫差」の冒頭は、「又内々私語ケルハ、恩ヲ忘レ無勢ナルニハヨラズ、只天運ノシカラシムルニ依ベキ事也。其謂ハ」とされている。卷第十七では、勾踐が生け捕られた理由を「吳王ハ元

ヨリ勢多威スグレタリケレバ」、すなわち夫差が「勢多」いためとしながら、「無勢」であり、夫差に助命された「恩ヲ忘レ」た勾踐が後に夫差を滅ぼしたように、清盛に助命された「恩ヲ忘レ」、いま「無勢」ながら挙兵した頼朝が後に平氏一門を滅ぼすであろうという先例として会稽山の話が示されるため、それに呼応する形で勾踐が生け捕られた理由に軍勢の差が挙げられていると言えよう。このように盛衰記において巻第二と巻第十七に重複して見られる故事説話を比較しながらそれぞれが引かれている「山僧焼清水寺」と「大場早馬」との対応を考えることによって、学習者は中国故事説話がどのように取り入れられ、用いられているかを捉えることができる。

勾踐が夫差に助命される展開について、巻第二では、勾踐が熱心に奉公したため命を助けられたとされているが、巻第十七では、夫差が憐れみをたれて命を助け、臣下はそれを諫めたが、勾踐が熱心に奉公したため夫差は聞き入れなかったとされている（傍線部②）。巻第十七において勾踐を助命した夫差を諫め、「敵ヲ宥テ必後ニ悔アリ」と語る臣下は、巻第二には見られないものである。この発言は、「大場早馬」において頼朝挙兵の知らせを聞いた清盛の描写に呼応したものである。このとき清盛は「座ニモタマラズ躍上々々シ給ケレ共、後悔今ハ叶ハズ」とされている。すなわち頼朝の助命を後悔する清盛に対する「後悔今ハ叶ハズ」に呼応する形で、巻第十七の会稽山の話説話においては「敵ヲ宥テ必後ニ悔アリ」と語られていると言えよう。また、前述のとおり、清盛は「頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ。

縦故池ノ尼公イカニ宥給フトテモ、入道ユルサランニハ、頸ヲバ継ベキヤ」と、「恩」を「忘ル」ことに言及している。「勾踐夫差」の冒頭の「恩ヲ忘レ無勢ナル」は第一に頼朝を指すのであり、その先例として勾踐が示されているのである。なお、巻第十七では、「勾踐夫差」に続く「光武天武即位」においても、光武皇帝が落ち延びたときには二十八騎ながら、後に世を取って天下を治めたこと、天武天皇が落ち延びたときには十七騎ながら、後に即位したことが描かれるほか、「毒蟲ノ種子ヲバ忽ニ失フベキニテ有ケルヲ」とされており、軍勢の数にはよらないことや敵を救すべきでないことの先例が示されている。

巻第十七では、赦された勾踐がその帰途に蛙を敬う逸話が見られる（傍線部③）。これは巻第二には見られないものであるが、「韓非子」に類似の内容があり、呉を討つために命を投げ出して奮闘してくれる人民を求めた勾踐が、気力のある蝦蟇を見て敬礼することによって、勇気ある人々を得たとされている。⁽²⁾「無勢」であった勾踐が兵を集め、「數萬ノ軍ヲ起シテ終ニ呉王夫差ヲ亡シ」たことが頼朝に通じるため、巻第十七においてはこの逸話が見られるのではないか。

そして、それぞれの記事の末尾について、巻第二では「會稽山ヲ論ジテ、軍ニ負尿ヲ飲ハ耻也。本國ニ還テ敵ヲ誅テ、彼山ヲ知ハ耻ヲ雪ル也。故ニ會稽ノ耻ヲ雪ムトイヘリ。去七日ハ山門額ヲ切レテ耻ニ及、今九日ニハ清水煙ト昇テ面ヲ洗グ。實ニ耻ヲ雪ト云ヘキニヤ」とされ、巻第十七では「サテコソ會稽ノ耻ヲバ雪メケレ。其ヨリシテゾ、耻ヲミルヲバ會稽トモ申ケル」とされている（傍線部④）。前述のとおり、

卷第十七の会稽山の記事説話は、戦に勝つて敵を滅ぼすことが恩や軍勢によるのではないという先例を示し、頼朝の挙兵の成否を示唆するものとなっている。一方、卷第二の記事は、「額打論」とその報復としての「山僧焼清水寺」に続くため、「會稽山ヲ論ジテ軍二負尿ヲ飲」と「額ヲ切レ」、「敵ヲ誅テ彼山ヲ知」と「清水煙ト昇」と、「額打論」⁽³⁾「山僧焼清水寺」の内容と照らし合わせて結んでいる。

盛衰記において、会稽山の記事説話は二度掲載されるが、それは単なる重出ではなく、卷第二では「額打論」とその報復としての「山僧焼清水寺」に描かれる清水寺焼き討ちに、第十七では「大場早馬」に描かれる頼朝の挙兵に対応した叙述となっており、それを用いることによって、学習者は中国故事説話がどのように取り入れられているかを捉えることができる。さらに、この会稽山の記事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」と密接な関連があり、漢文の授業へとつなげてゆくことができるのである。

四、臥薪嘗胆

国語教科書のなかには、漢文の教材として「臥薪嘗胆」が取り上げられているものがある。たとえば、『国語総合 古典編』東京書籍、平成二十八年三月十日検定済(国総335)では、「臥薪嘗胆」として、以下の本文が掲載されている。本文は、教科書では漢文訓読文であるが、本稿では書き下し文にして表記する。

闔廬伍員を挙げて、国事を謀らしむ。員、字は子胥、楚人伍奢

の子なり。奢誅せられて呉に奔る。

呉の兵を以て郢に入る。呉越を伐つ。闔廬傷つきて死す。子の夫差立つ。子胥復た之に事ふ。夫差讎を復せんと志す。朝夕薪中に臥し、出入するごとに人をして呼ばしめて曰はく、「夫差、而越人の而の父を殺ししを忘れたるか。」と。

周の敬王の二十六年、夫差越を夫椒に敗る。越王句踐、余兵を以て会稽山に棲み、臣と為り、妻は妾と為らんと請ふ。子胥言ふ、「不可なり。」と。太宰の伯嚭越の賂ひを受け、夫差に説きて越を赦さしむ。

句踐国に反り、胆を坐臥に懸け、即ち胆を仰ぎ之を嘗めて曰はく、「女会稽の恥を忘れたるか。」と。国政を挙げて大夫の種に属し、而して范蠡と兵を治め、呉を謀るを事とす。

太宰の嚭子胥の謀の用ゐられざるを恥ぢて怨望すと譖す。夫差乃ち子胥に属鏤の劍を賜ふ。子胥其の家人に告げて曰はく、「必ず吾が墓に檀を樹えよ。檀は材とすべきなり。吾が目を抉りて、東門に懸けよ。以つて越兵の呉を滅ぼすを觀ん。」と。乃ち自刎す。

夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以つてし、之を江に投ず。呉人之を憐れみ、祠を江上に立て、命づけて胥山と曰ふ。

越は十年生聚し、十年教訓す。周の元王の四年、越呉を伐つ。呉三たび北ぐ。夫差姑蘇に上り、亦成を越に請ふ。范蠡可かず。夫差曰はく、「吾以つて子胥を見る無し。」と。帛冒を為りて乃ち

死す。

（二十八史略）

夫差の父である呉王の「闔廬」は、盛衰記巻第二の会稽山の故事説話に「闔閭」として登場した人物であり、夫差は父の仇討ちのため「臥薪」したとされている。そして夫差は越を破り、句踐（勾踐）は会稽山で助命を請う。このとき夫差に仕えていた子胥が「不可なり。」と述べる姿が描かれているが、これは盛衰記巻第十七の会稽山の故事説話において、「敵ヲ宥テ必後ニ悔アリ」と諫める臣下に通じるものである。

句踐は国に帰り、「嘗胆」して、「会稽の恥」という故事成語の由来となる「女会稽の恥を忘れたるか。」という言葉を自らに語りかけたとされている。「会稽の恥」から二十年を準備に費やした後、ついに越は呉を攻める。夫差は以前の句踐と同様に講和を越に請うが、参謀である范蠡の進言によって句踐は講和を受け入れず、夫差は自害したとされる。なお、本文引用に用いた教科書では、「語句と表現」として「次の故事成語は、どのように使われるか。」という問いがあり、「臥薪嘗胆」「会稽の恥」「先ず隗より始めよ」「鶏鳴狗盗」が出題されている。

古文の授業のなかで盛衰記巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」、巻第二「額打論」「山僧燒清水寺」から「會稽山」を先に学習している場合には、その中国故事説話を漢文の授業のなかで捉えて学習につなげるとともに、盛衰記に取り入れられた会稽山の故事説話との比較、「勾踐夫差」や「會稽山」には見られない夫差の「臥薪」と勾踐

の「嘗胆」の描写から「臥薪嘗胆」をはじめとした故事成語の学習にもつなげてゆくことができる。また、漢文の授業のなかで「臥薪嘗胆」を先に学習している場合には、その中国故事説話が盛衰記にどのような取り入れられ、用いられているかを古文の授業のなかで学習するとともに、「臥薪嘗胆」には見られないさらに具体的な「会稽の恥」、すなわち捕虜となった勾踐が赦され帰国するまでの間、夫差に熱心に奉公する姿がどのように描かれているかを捉えることができる。

五、始皇燕丹

盛衰記巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」へ、そして国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」へと展開し、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく古文・漢文複合教材の可能性を考察してきたが、さらにほかの漢文の教材にも発展させてゆくことができる。先述のとおり、巻第十七「大場早馬」において、頼朝拳兵の知らせを聞いた清盛の「頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ」「重恩ヲ顧ズ、浄海ガ子孫ニ向ヒ弓ヲ引矢ヲ放シ事、佛神ヨモ御免アラジ。佛神免シ給ハズバ、天ノ責忽ニ蒙ルベシ」という発言に、「時ノ才人ドモ」は、「仰少モ違ベカラズ。朝憲ヲ嘲リ、王命ヲ背ク者、昔ヨリ今ニ至マデ素懷ヲ遂ル者ナシ」と述べ、その先例を示してゆく（盛衰記 巻第十七「謀叛不遂素懷」）。それは頼朝の「謀叛」が「不遂素懷」であろうことを例証するものである。その一つとして、以下のような故事説話が続いている。

恩ヲ忘テ仇ヲ存ル者、我朝ニモ不限必ズ亡ベリ。唐國ニ燕太子丹ト云人、秦始皇ヲ傾ントテ軍ヲ起タリケルガ、燕丹ハ軍ニ負、始皇帝ニ捕ハレテ、深ク誠ヲカレ六箇年ヲ經ニケリ。(中略)燕丹ハノガレ難キ罪科ヲノガレ本國ニ被還テ、再父母ヲ見ケレバ、深ク始皇ノ恩ヲ報ゼントコソ思ベキニ、其情ヲ忘テ秦國ヲ亡サント巧ム心切ニシテ、荊軻大臣召テ被仰含ケレバ、(中略)「燕丹昔ノ恩ヲ忘テ、還テ始皇ヲ傾ント計シカバ、己ガ身空ク亡ヌ。サレバ頼朝モ平家ニ命ヲ被助シ者ニアラズヤ。縦報謝ノ心コソナカラム、争カ平家ヲ背奉ベキ。イカニ謀叛ヲ起トモ佛天豈ユルシ給ベシヤ。其上指當テ誰カハ流人ニ同意スベキ。無勢ニシテハ又素懷遂ガタシ。強ニ驚思召ベカラス」ナンド色代申ケレバ、入道モ「左コソ存ズレ」トゾ宣ケル。

(盛衰記 卷第十七「始皇燕丹勾踐夫差」)

本文引用に用いた『源平盛衰記 慶長古活字版 第三冊』(勉誠社、一九七八・五)で二十一ページに及ぶ長大なものであるため、本稿では中略して示したが、「朝憲ヲ嘲リ、王命ヲ背ク者、昔ヨリ今ニ至マデ素懷ヲ遂ル者ナシ」という本朝の先例に続いて、「恩ヲ忘テ仇ヲ存ル者、我朝ニモ不限必ズ亡ベリ」として、始皇に敗れて捕虜となつた燕丹が、帰国した後、「深ク始皇ノ恩ヲ報ゼントコソ思ベキニ、其情ヲ忘テ秦國ヲ亡サント巧ム心切ニシテ」、荊軻を刺客として遣わすが、荊軻は討たれ、その後、燕丹も始皇によって攻められ、討たれたとされている。そして、昔の恩を忘れて始皇を滅ぼそうとした燕丹が

己を滅ぼしたように、清盛に助命された頼朝の謀叛も成功しないであろうと「色代」するのである。覚一本などにも同様の故事説話が見られ、人々が色代しているが、先述のとおり、盛衰記では、さらにこの後、「又内々私語ケルハ、恩ヲ忘レ無勢ナルニハヨラズ、只天運ノシカラシムルニ依ベキ事也。其謂ハ」として、「勾踐夫差」が続いている。すなわち盛衰記では、頼朝拳兵が成功しないであろうという先例として本朝の「謀叛不遂素懷」ものや「始皇燕丹」が示される一方、成功するであろうという先例として「勾踐夫差」もまた示されているのである。また、盛衰記では、色代する言葉のなかに「燕丹昔ノ恩ヲ忘テ」のほか、「指當テ誰カハ流人ニ同意スベキ。無勢ニシテハ又素懷遂ガタシ」とあり、「勾踐夫差」の冒頭の「恩ヲ忘レ無勢ナルニハヨラズ」は、これを受けた形となっている。

六、荊軻伝

さて、この故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」と密接な関連があり、漢文の授業へとつながてゆくことができる。すなわち盛衰記では、巻第十七「大場早馬」から「臥薪嘗胆」へと展開するだけでなく、さらに「荊軻伝」へと展開することもできるのである。たとえば、『精選古典B 漢文編』東京書籍、平成二十九年二月二十八日検定済(古B332)では、「荊軻伝」は「風蕭蕭兮易水寒」と「図窮而匕首見」の二つに分けられており、まず、「風蕭蕭兮易水寒」として、以下の本文が掲載されている。本文

は、教科書では漢文訓読文であるが、本稿では書き下し文にして表記する。

是に於いて太子予め天下の利匕首を求め、趙人徐夫人の匕首を得、之を百金に取る。工をして薬を以つて之を焔がしめて、以つて人に試みるに、血濡縷して、人立ちどころに死せざる者無し。乃ち装して、為に荊卿に遣る。

燕国に勇士秦舞陽有り、年十三にして人を殺し、人敢へて忤視せず。乃ち秦舞陽をして副と為さしむ。荊軻待つ所有り、与に俱にせんと欲す。其の人遠きに居り未だ来たらず。而るに行を治むるを為す。之を頃くするも、未だ発せず。太子之を遅しとし、其の改悔を疑ふ。乃ち復た請ひて曰はく、「日已に尽く。荊卿豈に意有りや。丹請ふ先に秦舞陽を遣はすを得ん。」と。荊軻怒り、太子を叱して曰はく、「何ぞ太子の遣はすや。往きて返らざる者は、豎子なり。且つ一匕首を提げて、不測の彊秦に入るに、僕の留まる所以の者は、吾が客を待ちて与に俱にせんとすればなり。今太子之を遅しとす。請ふ辞決せん。」と。遂に発す。

太子及び賓客の其の事を知る者、皆白衣冠して以つて之を送る。易水の上に至り、既に祖して道を取る。高漸離筑を撃ち、荊軻和して歌ひ、変徴の声を為す。士皆涙を垂れて涕泣す。又前みて歌を為りて曰はく、

風蕭蕭として易水寒し

壮士一たび去りて復た還らずと

復た羽声を為して忼慨す。士皆目を瞋らし、髪尽く上がりて冠を指す。是に於いて荊軻車に就きて去る。終に已に顧みず。

（『史記』「刺客列伝」）

「風蕭蕭兮易水寒」では、刺客として旅立った荊軻が、友人である高漸離が演奏する筑の音に合わせて別れの歌を歌う姿が描かれる。高漸離の筑に合わせて荊軻が歌った「風蕭蕭として易水寒し 壮士一たび去りて復た還らず」という歌は、盛衰記巻第十七「始皇燕丹」にも見られるものである。

つぎに、「凶窮而匕首見」として、以下の本文が掲載されている。

荊軻樊於期の頭函を奉じ、秦舞陽地圖の匣を奉じ、次を以つて進む。陛に至り、秦舞陽色変じ振恐す。群臣之を怪しむ。荊軻顧みて舞陽を笑ひ、前みて謝して曰はく、「北蕃蛮夷の鄙人、未だ嘗て天子に見えず。故に振懼す。願はくは大王少く之を仮借し、使ひを前に畢ふるを得しめよ。」と。秦王軻に謂ひて曰はく、「舞陽の持する所の地図を取れ。」と。軻既に図を取りて之を奏す。秦王図を発く。凶窮まりて匕首見る。因りて左手に秦王の袖を把りて、右手に匕首を持ち之を搥す。未だ身に至らず。秦王驚き、自ら引きて起ち、袖絶ゆ。剣を抜くに、剣長く、其の室を操る。時に惶急し、剣堅し。故に立ちどころに抜くべからず。荊軻秦王を逐ふ。秦王柱を環りて走る。群臣皆愕く。卒かに起こること意はざれば、尽く其の度を失ふ。而して秦の法に、群臣の殿上に侍する者は、尺寸の兵を持するを得ず。諸郎中兵を執りて皆殿下に

陳なり、詔召有るに非ざれば、上るを得ず。急なる時に方たり、下の兵を召すに及ばず。故を以つて荊軻乃ち秦王を逐ふ。而れども卒かに惶急して、以つて軻を撃つ無くして、手を以つて共に之を搏つ。是の時侍医夏無且、其の奉ずる所の藥囊を以つて荊軻に提つ。

秦王方に柱を環りて走る。卒かに惶急して、為す所を知らず。左右乃ち曰はく、「王劍を負へ。」と。劍を負ひ、遂に抜きて以つて荊軻を撃ち、其の左股を断つ。荊軻廢す。乃ち其の匕首を引き以つて秦王を撻つ。中たらずして、銅柱に中たる。秦王復た軻を撃つ。軻八創を被る。軻自ら事の就らざるを知り、柱に倚りて笑ひ、箕踞して以つて罵りて曰はく、「事の成らざる所以の者は、生きながら之を劫かし、必ず約契を得て、以つて太子に報ぜんと欲するを以つてなり。」と。是に於いて左右既に前みて軻を殺す。秦王怡ばざる者良久し。

〔『史記』「刺客列伝」〕

秦王（始皇）に会つた荊軻は、燕丹から与えられた短刀で秦王を刺そうとするが届かず、秦王は逃げ、ついに荊軻は殺されてしまったとされている。秦王を暗殺しようとした燕丹の企みは成功しなかったのである。先述のとおり、盛衰記卷第十七では、これを先例の一つとして、恩を忘れて始皇を滅ぼそうとした燕丹が己を滅ぼしたように、清盛に助命された頼朝の謀叛も成功しないであろうと清盛に色代するのである。また、卷第十七「始皇燕丹」では、高漸離の筑に合わせて荊軻が「風蕭蕭として易水寒し 壮士一たび去りて復た還らず」と歌

う場面が末尾に置かれ、荊軻亡き後の高漸離の物語が続いている。国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」には見られない箇所を捉えるとともに、卷第十七「勾踐夫差」や卷第二「會稽山」の場合と同様に、中国故事説話が盛衰記にどのように取り入れられ、用いられているかを古文の授業のなかで学習することができよう。

七、おわりに

盛衰記卷第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」へ、卷第二「額打論」「山僧焼清水寺」から「會稽山」へ、そして国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」への展開、さらに、盛衰記卷第十七「大場早馬」から「始皇燕丹」へ、そして国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」への展開と、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく古文・漢文複合教材の可能性を考察してきた。古文の授業において盛衰記の該当章段を先に学習している場合には、その中国故事説話を漢文の授業のなかで捉えて学習につなげることができ、漢文の授業において「臥薪嘗胆」や「荊軻伝」を先に学習している場合には、その中国故事説話が盛衰記にどのように取り入れられ、用いられているかを古文の授業のなかで学習することができよう。「臥薪嘗胆」と「荊軻伝」の難易度や分量を考慮した場合、まず、漢文の授業において「臥薪嘗胆」を扱い、つぎに、古文の授業において盛衰記の該当章段を扱って「勾踐夫差」や「會稽山」と「臥薪嘗胆」との関連を捉え、さらに「始皇燕丹」を学習した後に、漢文の

授業において「荊軻伝」を扱うなど、古文の授業と漢文の授業を連動させて大きく展開する方法が有用であろう。ただし実践に際して、授業時間数などを考慮した場合、たとえば第一学年において漢文の授業で「臥薪嘗胆」および古文の授業で「大場早馬」から「勾踐夫差」を扱い、第二学年において古文の授業で「始皇燕丹」および漢文の授業で「荊軻伝」を扱うといった段階的な方法が考えられよう。また、本稿では、古文・漢文複合教材の可能性として、盛衰記巻第十七「大場早馬」から展開し得るすべての範囲を提示したが、学習者の理解度や進度によって、部分的に切り出し組み合わせる展開することもできるものである。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容（2）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、さらに、学習者自身が国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義の理解を深めることに役立つものとして、古文・漢文複合教材の可能性が考えられよう。古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである盛衰記は、他の諸本にはない多くの故事説話を有しており、その特長を古文・漢文複合教材として用いることによって、古文の授業と漢文の授業を連動させた国語の授業を展開することができよう。

注1

巻第十七の会稽山の故事説話は、延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』（以下、長門本）にも、覚一本にも見られないものであるが、巻第二の会稽山の故事説話は、長門本にのみ内容の類似した記事が見られる。巻第二「會稽山」の冒頭は、長門本の叙述と密接に関連していると考えられる。

恥をす、かんといふは、異朝に稽山の洞といふ所あり。彼山得分あり。それと申は、十七の蚤あり。まゆ一もて糸千両をひく。されは一万七千両のいとなり。かるかゆへに、此山をは蚤山と名つけた。会稽山とも云。彼山に二人の主あり。会台將軍、稽貞鬼風といふ。二人して一年つ、此得分をとる。七月七日より合て、かつせんを遂く。

ただし、長門本では、蚤やまゆの値、合戦の日付といった具体的な数字が挙げられているほか、会稽山を争う人物の名前が「会台將軍」と「稽貞鬼風」であるのに対して、盛衰記では「允常」と「闔閭」とされている。これは『史記』に見られる名前前で、『史記』巻四十一「越世家第十一」には越王の允常と呉王の闔閭が戦ったとされ（『新釈漢文大系第86巻 史記 六（世家中）』明治書院、一九七九・十）、その後、それぞれの子息、勾踐・夫差の戦いへと続いている。盛衰記における会稽山の故事説話は、この二人の戦いが骨格となっている。

(2) 『中国古典文学大系第五巻 韓非子 墨子』平凡社、一九六八・四。

(3) 長門本の記事の末尾は以下のとおりである。

去年かちたるものは今年負、今年かちたるものは来年まけるゆへに、稽山の麓にて、年々うち替々本意を遂るゆへに、先のはちをいまきよむ。仍、「くはいけの恥をきよむ」とはいへり。

去七日は山門たちまちに恥にあひ、今九日は清水寺又はちを見る。これ則、会台鬼風に可違哉。

（長門本 巻第一「清水寺炎上事」）
長門本では、双方が交互に戦に勝って恥を雪めるという展開を、「去年」「今年」と「去七日」「今九日」、「会台」「鬼風」と「山門」「清水寺」と、さらに明確な対応関係で示しているが、巻第二の記事はその末尾においても長門本と密接に関連していると考えられる。すなわち

卷第二の記事は、同じ位置に会稽山の故事説話を挙げる長門本の叙述に通じながら、卷第十七にある同じ故事説話にも一致する内容となっている。

引用文献

盛衰記―『源平盛衰記 慶長古活字版 第一冊』 勉誠社、一九七七・一〇、『源平盛衰記 慶長古活字版 第三冊』 勉誠社、一九七八・五。(句読点・濁点等は私に付す。)

※本稿は、筆者の博士学位論文(早稲田大学、二〇二〇年)の一部をもとにしたものである。